

Dental Congress の記事を pp. 679~1099 にわたり付録として載せている。

2) 第3回万国歯科医学会・日本組織委員会歯学研鑽第3号、第5号(明治32年)には Louis Ottofy が窓口となり(書記), 小幡, 高山を名誉会長・会長とする組織を作っている。

3) 血脇守之助 Dental Cosmos 誌に『日本歯科医学最近の進歩と現状』につき寄稿(1902)

4) 榎本積一 F.D.I. 教育委員に推薦される(1904)

4) 血脇守之助「日本の歯科医学」と題する論文を第4回万国歯科医学会(1904年セントルイス)に送り Dental Cosmos 47巻(1905)に掲載される。

ここまでは高山紀斎以外には出席者がなかったが、その後は次第に日本人出席がふえた。

6) 島峰徹, 苗賀房三郎, 第5回万国歯科医学会(ベルリン)に出席(1909, 明42年)

7) 島峰徹, 川合渉, 第6回万国歯科医学会(ロンドン)に出席(1914, 大3年)したが, 第1次大戦のため流会。

8) 島峰徹, 奥村鶴吉, 岡田満, 中川大介, 第7回フィラデルフィア大会(1926, 大15年)に出席。

18. 歯の名称の変遷について

日本歯科大学新潟歯学部 本間 邦則

歯の名称について故藤田恒太郎教授(歯の解剖学, 昭38)は次のように記載している。「切歯」は dens incisivus, incisor, Schneidzahn の邦訳であるが, 「門歯」はわが国独自の名称であろう。何時頃誰が用いはじめたか不明であるが, 明治初年の医学書である「布列私解剖図譜」には「斷歯」というむつかしい用語が与えられている。「斷」は「かむ」または「かじる」という意味の字である。「切歯」を「截歯」と書く人もあったが, 「截」は「切」と殆ど同義語であるから, わざわざむつかしい字を使うには及ぶまい。初め「切歯」は専ら歯科医学会のみで用いられたが, 今は日本医学会の公定用語となった。「犬歯」は dens caninus

の訳語で, 今は広く一般化しているが, 「布列私解剖図譜」では「牙齒」を用いている。「臼歯」はいうまでもなく dens molaris, molar, Mahzahn などの訳であるが, すでに「解体新書」には「齧歯」という言葉が使っており, 「布列私解剖図譜」もこれに従っている。「齧」が簡単化されて「臼」となった歴史は著者には詳かでない。因みに「解体新書」・「医範提舉」・「重訂解体新書」などでは切歯や犬歯に対して何も学名を与えていない。英語の incisor, cuspid, gicuspid, molar なる称呼は John Hunter 氏の提唱したものであるという(山田平太)。

以上のことについて興味深く読み, 歯の名称の変遷についての調査を試み若干の知見を得たので報告したいと思う。

明治4(1871)年の「解体語箋」(大野九十九著, 文部省官板)は当時の解剖用語集ともいべきものであるが, 「門歯」・「犬歯」・「小白歯」・「大白歯」・「智歯」と記載があるので, この頃にはすでに現在のような用語になってきていたものと思われる。日本で古い百科辞典ともいえる「和名類聚抄」源順編, 承平年間<931~937>版)には「板歯(ヌカハ)」・「牙(キハ)」・「齧(ウスハ)」と記載している。

「解体新書(安永3<1774>)」には「板歯上下合シテハツ」・「犬牙上下合シテ四ツ, 一ニ眼牙ト名ヅク」・「齧歯上下合シテ十有六」・「真牙上下合シテ四ツ」……とあり, 犬歯は「犬牙」とあり「眼牙」ともいうとあり, 智歯のことは「真牙」と記している。「虞列伸氏解剖訓蒙図」は Henry Gray (1827-1861) の原著を松村矩明(1842-1877)が翻訳したものである。原著 Anatomy, Descriptive and Surgical はその後も版を重ねて1949年(30版)と1973年(35版)では大改訂がおこなわれて120年間も世界の医学界で愛読されている解剖学書である。その松村矩明訳は明治5(1872)年刊であるが, 「前歯」・「犬歯」・「小白歯」・「大白歯」となっている。また東京大学の初代解剖学教授であった田口和美の著「解剖攬要」(明治10~15年刊)は日本ではじめての総合的な系統解剖学書であるが, 「門歯(切歯)」・「犬歯(尖頭歯)」・「小

臼歯（三頭臼歯・前臼歯・頬歯）」・「大臼歯（三頭臼歯・後臼歯）」とある。明治12（1879）年刊の小林義直訳述「小学校用養生浅説」には「前歯（切歯）」・「犬歯（別名胃歯又眼歯）」・「齲歯」・「智歯」とある。それ故、明治10年代頃より切歯の名称が用いられはじめ、齲は臼歯となってくるのもその頃のことかと考えられる。

「解体新書」の原著となったといわれる J.A. Kulmus の「Anatomische Tagellen (1722年版)」には Dentes incisores, Dentes canini, Dentes molares, Dentes sapientiae とある。また J. Hunter の「The Natural History of the Human Teeth (1778年版)」には incisor, cuspid, bicuspid, grinder または molar, dens sapientiae と記載されている。

以上のことを中心として歯の名称の変遷について考察を試みたいと思う。

19. 羅・葡・日対訳辞書（天草版1595年）に見られる歯科関係用語について

九州歯科大学 ○嶋村 昭辰
福岡歯科大学 上瀉口 武

Xavier (1549), Almeida (1552) らの渡来に始まるキリスト教伝導に伴って、16世紀のヨーロッパ教会医学、いわゆる南蛮医学が伝来されたが、今ではその方面の関係記録のほとんどが消滅されて、その内容を詳細に知る術がないようである。したがって、医学以外のキリシタン版の諸書類から医歯系用語などを通してその一端を推考せねばならない。

この度、天草コレジオ版（1595年刊）の羅葡日対訳辞書（Dictionarivm Latino-Lvstitanicvmac Iaponicvm……）に収録されている歯学関係用語のピックアップをし、それによって当時の歯科事情、医療思想の推論をはかることを試みた。

用語の迸出は、該辞書の原本の各頁と対比させて見やすい文字に編成した島正三・編：羅葡日対訳辞書検案（文化書房博文社刊・昭和52年）をもとにして行ったものである。まだ完全な収録は出

来ていないが、現在までに得られた用語の一部について報告する。

葡語を除く羅日対訳だけの一部を次に掲げる。

Dens, dentis: Fa 歯

Dentes molares sive maxillares: Vocuba 奥歯

Dentes genuini: Voya xirazu 親不知

Dentes primores seu adversi: Mucaba 向歯

Dentes canini: Quiba 牙

Denticulus: Chijsaqi fa 小さき歯

Denticulatus: Nocoguiriba naru mono 鋸歯なるもの

Dentifragibulum: Fauo uchicudaqu dogu 歯を打ち砕く道具

Dentifracium: Fauo migaqu cusuri 歯を磨く薬

Dentiscalpium: Yōji 楊子

Centitio: Faga uoyuru contonari 歯が生ゆることなり

Caries: Zaimoquono muxni curauarete cuchitaruuo yū 材木の虫に食らわれて朽ちたるをいう

Cancer: Cani; fitono mini ideguru daijinaru casano na 蟹：人の身にいでる大事なる瘡の名

20. 再び鎌田玄台の口腔外科について

福岡歯科大学 ○上瀉口武
九州歯科大学 嶋村 昭辰

本学会において、大洲藩医・鎌田玄台（寛政6年～嘉永7年）の著書“外科起癢”（嘉永己丙、1849年刊）にみられる口腔外科について報告をした。とくに、欠唇手術の項にみられる蘭法の手術術式を批判する文、「近時蘭説ニ欠唇ノ療術ヲ拳ル者ヲミルニ針ヲ横ニ刺通シ其両端ニ絲ヲ纏ヒ掛ルノ説アレトモ……」における蘭説が Ambroise Paré (1510～1590) の外科全書（1575初版）に由